

03-2 対人刺激に過敏な統合失調症患者に対するショートケアにおける個別性を重視した作業療法介入の重要性

○神志那 武(OT)¹⁾³⁾, 木村 敦(MD)¹⁾, 青山 慎介(MD)¹⁾, 橋本 健志(MD)²⁾

1) 神戸大学医学部附属病院

2) 神戸大学大学院 保健学研究科

3) 神戸大学大学院 保健学研究科 博士課程後期課程

Key word : 統合失調症, 地域生活, (個別介入)

【はじめに】窪田彰(2018)は、外来には通うが自閉的生活を送る患者への働きかけの必要性を述べている。デイケアやショートケア(以下、SC)は支援の1つであるが、利用中断が課題である。渡辺厚彦ら(2010)は利用中断した統合失調症患者は不安や緊張が強かったと報告し、納戸昌子(2003)は強い対人緊張や被害的になりやすい等により、集団適応が難しい場合は個別支援も重要と述べているが、具体的な介入方法や経過に関する報告はほとんどない。

【目的】対人刺激に過敏で被害妄想を持ちやすく、自閉的生活を送っていた統合失調症患者が、SCを継続利用し、他者と共に過ごせるようになり、地域活動支援センター(以下、地活)へも通うようになった。この経緯と、変化に寄与したと思われる治療環境や個別性を重視した作業療法介入を報告する。本報告に際し、事例に同意を得た。

【事例紹介】40歳代後半、男性、統合失調症。高校卒業後、鉄道会社等で勤務。10歳代後半に精神科受診、入院歴あり。30歳代半ばに当院受診、2年半の入院後、就労継続支援B型事業所等を数ヶ所利用したが、被害妄想等により利用中断し、自閉的生活を送っていた。昨年、主治医の勧めで当院SC利用開始。当院SCは定員10名で、並行型個別プログラムが中心である。

【初期評価】「また作業所へ通いたい」、「人と話したい」と希望するが、対人緊張が著しく、被害妄想の訴えがある。週1回利用で開始したが、利用後、数日間は疲労が残ると話した。新版STAI特性不安55点、状態不安55点(共に高不安域)。WHO-QOL26合計点68点、PANSS合計点103点。服薬(CP換算)量は1,050mg。

【治療計画】「他者がいる環境に慣れる」、「しんどさを表出できる」を短期目標とし、まずは継続参加を目指した。活動は並行型個別プログラム(頻度は2週間に1回に変更)にて、他者に過剰な注意を向けずに過ごせるよう、作業に集中しやすいスキルギャラリー

を行った。介入方針は、

- (1) 初めは他者と座る場所を離し、他者との間に遮蔽物を置くことで、対人刺激等を極力減らし、事例の希望や様子に応じて段階的に刺激量を増やす
- (2) 開始・終了時と活動中に複数回の声かけを行い、事例が緊張感やしんどさを表出できる機会の確保や信頼関係構築を目指す
- (3) 主治医と密に連携し、SCを安心して利用でき、また、精神症状悪化を回避できるように助言や環境調整等を行う

の3点とした。

【経過・結果】介入開始時より被害妄想は持続したが顕著な症状悪化はなく、声かけにてしんどさを表出できた。徐々に緊張感・疲労感は軽減し、4ヶ月経過時に、事例と相談し、段階的に対人刺激を増やした。8ヶ月経過時に自ら地活に週1回通所開始。9ヶ月経過時には、他者のそばで過ごし、対人交流も少し見られるようになった。地活への参加により、SCに加え、地活での対人関係に伴う被害妄想の訴えもあったが、どちらも介入を行うことで、強固になることはなく、継続参加できた。1年経過時の評価尺度スコアは新版STAI状態不安46点、特性不安48点(共に標準域)に低下。WHO-QOL26合計点83点に向上。PANSS合計点103点で不変。服薬(CP換算)量は3ヶ月経過時に1,250mgに増加後、変化なし。

【考察】今回、対人刺激に過敏で通所施設の利用中断を繰り返し、自閉的生活を送っていた事例が、精神症状の悪化なく、主観的評価が向上し、他者と共に過ごせ、地活にも参加が広がった。これは、主治医による薬物調整等に加え、対人刺激が少ない小規模SCで、声かけや助言、環境調整により、段階的に他者に慣れることができた結果であると考えられ、対人刺激に過敏な統合失調症患者には個別性を重視した介入が重要であると示唆された。